

《珍皇寺参詣曼荼羅》について—構図と絵師に着目して—

村上かれん（京都大学）

京都市東山区の大椿山六道珍皇寺に所蔵される《珍皇寺参詣曼荼羅》[以下、本図]は、室町時代後期から江戸時代にかけて作成された「参詣曼荼羅」と呼ばれる一連の絵画群の中に位置付けられる絵画である。参詣曼荼羅の絵画表現については、素朴な筆致を呈するものが多く、その大半は、土佐派や狩野派等の正系の絵師の手によるものではなく、町絵師の工房による制作だと考えられている。

しかし、本図は参詣曼荼羅の範疇に入れられる作品でありながら、桃山時代の狩野派様式が看取されることが以前から指摘されてきた。本図を紹介した土居次義氏が慶長頃の狩野派の画家の可能性を指摘したことを端緒として、展覧会図録の作品解説等でも、人物や衣服に見られる筆法を根拠に、絵師を桃山時代の狩野派と認めるのが一般的見解となっていた。2021年に久野華歩氏が初めて本図について具体的に絵画様式を検討した論考が発表し、本図の絵師について、狩野孝信（1571-1618）・狩野甚之丞（生没年不詳）・狩野貞信（1597-1623）らとの類似点を示し、桃山時代後期から江戸時代初期に活躍した狩野派の流れにあるとした。また、久野氏は制作背景についても考察し、本図の制作の契機として慶長・元和の堂舎再興の動きがあったと推定した。

久野氏は具体的な狩野派の絵師名を提示し、制作背景を明らかにした点で、本図の研究を一步進めたが、本図の人物描写は狩野孝信や貞信らの特徴と一致しない点も多い。また、本図は同じ狩野派の元信工房の作とされる《富士曼荼羅図》（静岡県・富士山本宮浅間大社蔵）と比べても全体の完成度は劣り、狩野派の中でもどのような絵師が関わったのかを検討する必要がある。

そこで本発表では、本図の人物について、改めて狩野派の諸絵師と比較した結果、狩野山楽（1559-1635）の筆致との類似点があることを提示する。ただし、形において山楽風が顕著であるが、描線の質は明らかに劣ることから、山楽工房の弟子複数人による制作であることを想定する。

また、多くの参詣曼荼羅では、寺社を聖地とするための構成要素として、山や川(海)、雲や花咲く樹木が描かれるが、本図には描かれない。発表者は、珍皇寺は京都の人々にとって盂蘭盆の寺院であったことを踏まえ、定型的な構成要素はあえて省略され、珍皇寺の盂蘭盆会の様相を大きく描くことが志向されたということを推論する。

最後に、同じ珍皇寺に伝来する《熊野観心十界曼荼羅》甲本の絵師について、狩野山雪筆《武家相撲絵巻》（東京・相撲博物館蔵）との比較を通じて、山雪との類似点を指摘する。珍皇寺に伝来し、制作年代も大きく隔たりがないと考えられる二つの作品に、山楽・山雪との類似点が看取されることから、近世初期の珍皇寺と京狩野の工房との繋がりの可能性を提起したい。